



発行所
 社団法人 国民文化研究会
 (九州←→東京←→全国)
 東京都渋谷区東1-13-1-402
 振替 00170-1-60507
 電話 03-5468-6230
 F A X 03-5468-1470

月刊「国民同胞」編集部
 毎月一回10日発行
 購読料 年間2000円

飛鳥の里に集ふ「五百羅漢」合宿

今夏の阿蘇合宿教室への第一歩

占部賢志

去る三月二十六日(金)から二十八日(日)にかけての二泊三日、奈良県明日香村に建つ(財)飛鳥保存財団研修所「祝戸荘」を会場に本会会員による春季合宿が営まれた。年度末の忙しい時期ではあったが、呼びかけ(二月号参照)に応へて各地から四十一名が参集し年来の企画が実現を見たことは何より有難かった。開会直後



一人一人が近況を披瀝するところから日程は開始された。この合宿の柱の一つは「国文研活動」の在り方を忌憚なく語り合ふところにあつた。漫然と時間を費しても意味はないといふことで、幾つかのテーマを設けて十名の会員による発表が行はれ、それをもとに語り合つた。冒頭、布瀬雅義君(住友電装(株)生産技術部長)の発表には目を見張つた。とりわけ企業の要職にありながら、三万五千部といふ国内トップクラスのメールマガジン「国際派日本人養成講座」を毎週欠かさず発行し続けて既に三百号を超えてゐる。仕事の傍ら、一週間に一本の原稿を書き上げていくために、平日は計五時間、休日五時間の合はせて十時間を毎週割いて発行してきたといふ。海外出張も多く空港の待合室でもキーを叩く由、当方の如き体たらくには活を入れられる心地だつた。

藤新成信君(日章工業(株)代表取締役)の発表にも感服のほかはなかつた。経営の最前線で指揮をとりながらも、経営者仲間にごろごしを語り、学生とのあひだには「講孟余話」の輪読を通じた交流を継続し、最近では会員十名ほどで黒上正一郎先生の「太子の御本」の輪読会も始めたといふ。

とても常人の及ぶところではないと言ふなかれ。工夫は至るところに見られる。「太子の御本」輪読の場合、日曜の午前七時から十時のあひだに集つて取り組んでゐる由。「お互ひ一番時間を有効に使へる時間帯なので意外に欠席はないんですよ」と、日常を淡々と語る藤新君の話にあちこちから感嘆の声が洩れた。それは寸暇を惜しんで実践される活動に対してだけではない。国文研に縁ある者として今もなほ道を求めて已まない強靱なこころざしへの共感だつた。このほか会員による発表は陸続と続いたが、その内容と議論の自身については紙面の都合で割愛する。いづれ深められた論策として本紙に掲載されることにならう。

文である。会場には宿舎から飛鳥の山道を歩むこと二十分、太子御生誕の場所と伝へられる橋寺の一角をお借りすることができ、感謝に堪へない。昼下がりのおよそ四時間近く、黒上先生が心血を注がれた言葉に心を寄せる体験は、忘れられない濃密なひとときとなつた。小柳志乃夫君(みずほコーポレート銀行登録部部長)の歌にその様子を偲んで頂きたい。

飛鳥なる橋寺の本坊の広間に集ひ「本読むかも」本坊の広間の襖取り払ひ長き輪となり「本に向ふ」太子ゆかりの橋寺に黒上の大人の「本を読めるかしこさ」師の君の厳しき人生観を偲はしむる御言葉友らと辿りゆきけり「総合的指導精神」を皇室につつつに仰ぐ幸をし思ふ

最終日にもなほ輪読は続いた。本紙四月号に掲載された加納祐五先生の「すずること(四)」をゲラ刷りで読み味はつたのである。本会の諸先輩方が挑まれた「思想の戦ひ」の意味を辿る厳粛な時間であつた。

その後各参加者は、夏の大合宿への思ひも新たに、春爛漫のまほろばの里を後に家路についたのだつた。

(福岡県立太宰府高等学校教諭)